

学 位 論 文 要 旨

氏 名 二 井 正 浩

題 目 グローバルヒストリー教育論研究 ―世界史教育の再構築―

グローバリゼーションが加速度的にエスカレートする現実に対して、世界史教育はどのように対応すべきであろうか。これについて、本研究では現行の世界史教育の問題を、①国家史および国家関係史を基本とした内容になっており、国家の枠組みを大前提とした認識を形成するものとなっていること、②その結果として、本来多層であるべきアイデンティティの中から、生徒は受動的にナショナルアイデンティティを所与のものとして強制されていること、として整理した。そして、これらの問題に対応すべく、近年の歴史研究でクローズアップされているグローバルヒストリー研究に着目し、世界史教育をグローバルヒストリー教育として再構築する論理について究明した。

第Ⅰ部の第1章では、グローバリゼーションへの対応を念頭に、現行の地理歴史科「世界史」によって形成される社会認識とアイデンティティ形成の課題を整理し、世界史教育をグローバルヒストリー教育へと再構築する意義について明らかにした。

第2章では、国民国家を相対化する視点を持つ現代歴史学の中から、グローバルヒストリー研究に着目し、グローバルヒストリー教育を構築する視点を検討した。具体的には、グローバルヒストリー研究を「多文化史 (Multi-cultural History) 型グローバルヒストリー」「越国家史 (Trans-national History) 型グローバルヒストリー」「超国家史 (Supra-national History) 型グローバルヒストリー」の3類型に整理し、これらのアプローチを取り入れた歴史教育として「多文化史型グローバルヒストリー教育」「越国家史型グローバルヒストリー教育」「超国家史型グローバルヒストリー教育」の3類型を構想した。

第Ⅱ部では、第2章で構想したグローバルヒストリー教育の3類型のカリキュラムについて、それぞれの特徴が生かされた事例を具体的に分析し、その有効性を検討した。第3章では、「多文化史型グローバルヒストリー教育」の事例として、「ニューヨーク州・グローバル・スタディーズ (NYGS)」をとりあげ、分析した。その結果、NYGSは世界を7つの文明圏・文化圏に分け、それぞれの歴史的展開を並列的に学習することにより、それぞれの地域の民族的なアイデンティティを尊重する、多文化的な教育となっていた。

第4章では、「越国家史型グローバルヒストリー教育」の事例として、R.ダンが全米の中等学校や大学の教員などと共同開発している世界史カリキュラム「ワールドヒストリー・

フォー・アス・オール・プロジェクト (WHFUA)」をとりあげ、分析した。その結果、WHFUAはパノラマ、ランドスケープ、クローズアップといった空間的・時間的尺度の違う三つの単元群を自由に組み合わせることによって、国民国家や民族文化の枠に囚われる思考を相対化し、その境界線を越える構成が実現していた。また、実際にWHFUAに基づいて行われた授業実践を収集し具体的に分析した結果、アイデンティティが多様で重層的なものであること、そしてアイデンティティが社会や状況の変化に伴って変化するものであることに気付かせようとする授業構成となっていることが明らかになった。

第5章では、「超国家史型グローバル歴史教育」の事例として、D.クリスチャンがビル・ゲイツ財団の支援を受けて開発している「ビッグ歴史・プロジェクト (BHP)」をとりあげ、分析した。その結果、BHPは地球を俯瞰する視点から歴史を考察させる点に特徴があり、特に人間の歴史は「技術革新」と「集団的 (集積的) 学習 (Collective Learning)」によって進化するという一元的な論理で構成されていた。

第3部では、グローバル歴史教育としての授業モデルの提示を行った。第6章では、超国家史型グローバル歴史教育として第2章で「超国家史型グローバル歴史研究」の事例として分析したA.リードの研究をもとに、17世紀の東南アジアを一つの歴史世界とし、国家の枠組みを前提としない地域的な相互作用や諸関係の歴史として説明する理論を探求する授業モデルを開発した。探求の論理に基づいて授業化するのには、探求の論理に基づく授業が、特定のアイデンティティの形成を積極的に意図しないため、結果としてアイデンティティの選択の自由が保障されるためである。

同じく第7章でも、超国家史型グローバル歴史教育として、前近代の中央ユーラシアを一つの歴史世界として説明しようとする杉山正明の「ユーラシア共生国家論」に依拠し、理論を探求する授業モデルを開発した。これも、遊牧民族の活動を中心に国家の枠組みに囚われない、地域的な相互作用や諸関係の歴史をするものとなっている。

第8章では、超国家史型グローバル歴史教育として、ガルトゥングの構造的暴力論に基づく「人権問題」の授業モデルを開発した。ガルトゥングは、国家単位では解決できない地球的諸課題への対応をめざすワールド・オーダー・モデルズ・プロジェクト (WOMP) の代表的研究者であり、彼の構造的暴力論は国家の枠を超え、地球上に生じている無意識的・潜在的な暴力関係について説明するものとなっている。世界を一元的な視点から描こうとする彼の構造的暴力論をもとに、ここでは「人権問題」について歴史的に探求させる授業を構想した。

終章では、世界史教育の再構築という観点から、グローバル歴史教育論研究の成果を総括的に整理している。